Trinity

キズナエピソード\_東山陽彩\_06

１２３４５６７８９０１２３４５６７８９０１２３４５６

１２３４５６７８９０１２３４５６７８９０１２３４５６７８９０

------------------------------------------

//ヴィジュアルノベル形式開始

数日後、陽彩の両親の友達から連絡が入る。

陽彩の両親は短期間だが、

近日中に仕事の都合で帰国する予定があるらしく、

陽彩が会いたがっていると知ると、出国の日を1日ズラして

時間を作ってくれるとのことだった。

陽彩の方は、一度は会うと言っていたが、

いざ当日になると子供のように駄々をこねて渋った。

//次ページ

会いたくないというより、

恥ずかしくてそういう態度を取っているように思える。

教えてもらったホテルに行くと、

ちょうど受付を済ませ、ラウンジに出ようとしている

陽彩の両親と出くわした。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//背景:ホテルのラウンジ

[陽彩の母]

「陽彩ちゃん……！

本当に来てくれたのね！

わざわざ連絡までしてくれて、ありがとうね？」

[陽彩]

「ん……久しぶり。

いい加減、ちゃん付けはやめてくれ。

それに、連絡したのはとびおだ……」

[陽彩の父]

「お、君がとびおくんだね？

話は聞いているよ。いつもありがとう！」

[陽彩の父]

「それにしても、大きくなったなあ陽彩！

スタイル抜群じゃないか！　いや～大したもんだ！

パパ、デルモさんかと思ってナンパするところだったよ！」

[陽彩の母]

「まあお父さんったら。

ウフフフ」

[陽彩]

「……

まず父はパパと名乗るのをやめてくれないか……」

[陽彩]

「二人とも、変わりないようで何よりだ。

仕事で忙しい中、

大した用もないのに、引き留めてしまってすまない」

[陽彩の父]

「はっはっは！　何を言ってるんだ！

家族が会うのに、用なんて必要ないだろう？」

[陽彩の母]

「そうよ、陽彩ちゃ…陽彩。

今日は色々、お話出来るるかしら？」

[陽彩]

「ああ……。

二人に僕の話が理解できるなら……」

[とびお]

「おい、そんな態度とることないだろ」

[陽彩の母]

「とびおさん、いいのよ。

じゃあ、学校は最近どう？

エリザちゃんとは仲良くしてる？」

[陽彩]

「別に普通だけど……学校は相変わらず――」

[とびお]

陽彩は両親からの質問に、

最初はぶっきらぼうに返事をしながらも、

顔には少し笑みを浮かべていた。

[とびお]

その表情に曇りはなく、

親といることに安心している自分に、

陽彩自身気が付いているようだった。

//暗転・時間経過

//ヴィジュアルノベル形式開始

「この間、エリザと共著で論文を書いたんだけど、

ぼくの記述のケチばっかりつけてきて――」

「とびおはココアを作るのは上手いが、

他はてんでダメで――」

「この間なんか、わざと教科書通りに

複素数平面の問題を解いてみせてあげたのに

気づいたら隣で寝てしまっていたし――」

いつの間にか、陽彩は無邪気な子供のような顔で

次々に身の回りのことを両親に話して聞かせていた。

両親もその話に、本当に楽しそうに耳を傾けている。

そんな家族の姿を、俺は微笑ましく見つめていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//暗転・時間経過

[陽彩の母]

「ふふふ……ああ、楽しい。

陽彩ちゃんとこんなに沢山おしゃべりできるなんて、

夢みたいだわ。お母さん、とっても幸せよ？」

[陽彩]

「恥ずかしいこと言うな……呼び方も戻ってるし」

[陽彩の父]

「うおっと！　楽しい時間はあっという間だね。

母さん、そろそろ飛行機の時間だよ」

[陽彩の母]

「あら、もうそんな時間なのね……。

陽彩ちゃん、ごめんなさい、

もう行かないといけないの」

[陽彩]

「あっ…………わ、わかった。」

[陽彩の父]

「母さん」

[陽彩の母]

「ええ、わかってるわパパ……。陽彩ちゃん？

お母さん達から、大事な話があるんだけどね、

聞いてもらえるかしら？」

[陽彩]

「？　なに？」

[陽彩の父]

「陽彩、前からずっと日本の学校が窮屈そうにしていたろ

パパ達、陽彩を日本に置いてきたことを、

ずっと後悔していてね……」

[陽彩の父]

「パパも、あっちに行ってから初めて知ったんだけど

向こうの学校には陽彩みたいな子用のカリキュラムが

充実してるし、絶対に陽彩にいい環境が揃ってるんだ」

[陽彩の母]

「こうやって、陽彩ちゃんとお母さん達、

ちゃんと仲良くできるようになったんだし、

向こうで、また3人一緒に暮らせないかしら？」

[陽彩]

「！……」

[陽彩]

「ありがとう……。

確かに、以前と違って

今の僕なら二人と上手く暮らしていける気がする。」

[陽彩の母]

「まあ…！　何て素敵――」

[陽彩]

「ただ……今はこっちで、

大切にしているものや人が沢山出来たんだ。

まだ、二人の元へは行けない」

[陽彩の母]

「そんな…！　陽彩ちゃん……」

[陽彩の父]

「そうか……陽彩は本当に大きくなったな…。

母さん、どうやら僕らはとびおくんに完敗したようだね！

ハッハッハッハ！」

[とびお]

「あ、え……！　えええ！

お、おい陽彩、本当にいいのかよ！」

[陽彩]

「うん、問題ない。」

[とびお]

「問題ないってお前、そんな大事なことをあっさり……」

[陽彩の母]

「いいわ、残念だけどしょうがないわね……。

じゃあ、本当に時間だから、お母さん達行くけど、

陽彩ちゃん、とびおさんも、元気でね？」

[陽彩]

「そ、そうか……！　うん……」

[とびお]

「……！」

[とびお]

「あの！

次はいつ帰ってこられるんですか？」

[陽彩]

「とびお……」

[陽彩の父]

「うーむ、まだ正確には決まっていないけど、

次は半年くらい先になってしまうかなあ！」

[とびお]

「そうですか……」

[陽彩]

「なんでとびおが落ち込む。

……聞いてくれてありがとう」

//暗転

[とびお]

「行っちゃったな」

[陽彩]

「だから、なんでとびおが気に病むんだ。

……とびおにはお礼を言わないといけないな」

[とびお]

「？　何の？」

[陽彩]

「他者との接触に対する自分の心情の変化が

とびおに起因していることの、だ」

[とびお]

「また、難しいことを言うな……。

なあ、さっき言ってた、大切な人って……？」

[陽彩]

「……帰納法的解釈をしてくれ。

この前教えたからわかるはずだ……」

[とびお]

「ごめん……多分それの時寝てた。

……じゃあ、俺の方からシンプルに言うぞ？」

[とびお]

「俺陽彩のことが好きだ。

ずっと一緒にいたい。

今まで言わなくて、順番が違うかもしれないけど」

[とびお]

俺は初めてきちんと陽彩に気持ちを言葉にして伝えた。

[陽彩]

「一緒にいるか……。

その言葉、温かいな」

[陽彩]

「ぼくは、こんなに単純なことを

無理に複雑なものとして捉えようとしていたんだな」

[陽彩]

「感情は、時に言葉で説明つかないこともあるのに」

[とびお]

「そうかもしれないな」

=========================スチルカットシーン開始=========================

[陽彩]

「とびお……！」

[とびお]

「ん？」

[陽彩]

「ありがとうな！」

[とびお]

陽彩はそう言って俺の腕を掴み、顔を近づける。

それは、この世界の全てを信じきっている、

幼い子供のような

[とびお]

綺麗な笑顔だった――

=========================スチルカットシーン終了=========================

//ADV形式終了

//18禁版はここでRシーン

//ヴィジュアルノベル形式開始

//背景:白い部屋

そこで意識が覚醒した。

「……あんな可能性もあったのかもしれない」

俺はひとりごちて、白い空間を眺める。

大きなスクリーンに、陽彩との思い出を幻視する。

//次ページ

本を楽しそうに読む陽彩。

文句言いながらも、真剣に勉強を教えてくれる陽彩。

普段クールだが、俺のことに嫉妬して頬を膨らます陽彩。

そして、家族と触れ合ったときに見せた穏やかな陽彩。

……そのどれもが愛しかった。

//次ページ

陽彩を守りたい。

俺は心にそう誓った。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//6話END